

# 時評

佐藤洋一郎 総合地球環境学  
研究所教授



今年の子年。十二支の最初の年である。最後をつとめるイノシシまで十二種の動物たちが登場するのは常識だ。ところがラオスのある地域では十二ではなく十三の動物たちが干支に含まれる。十三番目は、もちろんネコだ。鹿児島県の博物館

職員である川野和昭さんと調査に行ったとき、とある村の農家で聞き取るまでは、私も川野さんもそれを知らなかった。なぜネコか、との問いに対する農家の答えは余りに簡単。ネズミは倉庫の中の米を食べる悪い存在だが、ネコはそのネズミの天敵で、人の益になるからだ

## 13番目のネコ

という。収穫の時期ともなれば、ネコが喜ぶ魚をかたどった飾りを竹で作って畑に下げておくのだという。

十二支の本国中国でも、ネコは物語の中には登場する。そう、十二支に登録してもらおうよう神様のところに出かけてゆく日

ネズミだったという例の話である。それを恨んだネコはその後ネズミを追い回すようになったという話に、子供ながら納得したものだ。

今の日本では、ネコはペットとして飼われるか、さもなければ野良ネコという嫌われ者であるかのどちらかに「二極分化」している。ペットのネコはキャッ

ト・フードで育つ。しかもマンシヨンにはネズミなどめつたにいない。ネコがネズミを獲ることなど知らない今の子どもたち

にはこの話はきつと通じていないに相違ない。もっとも、ときどきリバイバルで放映される「トムとジェリー」をみれば、ネコとネズミは仲が悪いくらい

のことは知っているのかもしれない、などと思ってみたりもする。

どよりはずっと遅いらしい。飼

## ネズミ獲る姿、今は遠く

イヌと比べても、もうひとつ飼主には本心を見せないようなところがある。もっともそこがネコの魅力なのだ、希代のネコ好きに聞いたことがあるが、それはまったく同感だ。

ラオスでの調査が済んだ帰りの飛行機の中で、川野さんと顔を見合わせてはたと手を打

たことか一つある。大事なことを聞き忘れたのだ。皆さんはそれが何だと思われるだろうか。そう、干支が十三匹になったとすると、はたして還暦は六十五になるのだろうかという

ことである。日本でもネコを加えた十三支にすれば還暦の歳に年金が受け取れるようになるのだが、さて今の日本社会にこんな粋を理解する余裕があるだろうか。

さとう・よういちろう氏 京都大学大学院農学研究科修士課程修了。静岡大助教授を経て2003年10月から現職。植物遺伝学専攻。著書に「稲の日本史」(角川書店)「DNA考古学のすすめ」(丸善ライブラリー)など。